

第 64 回国際理解・国際協力・多文化共生のための全国中学生作文コンテスト東京都大会 金賞

白百合学園中学校 3年

藤本 節

課題②

世界の平和のために私たちができることは何か。

副題

語り継がれる歴史

二月十五日、十八時二十分。突然、シンガポール中に危機感を煽るようなサイレンが鳴り響いた。当時、シンガポールに住んでいた私は今まで、日本にいたときには経験しなかったようなことが起こり混乱した。後に調べて分かったのだが、あのサイレン音の正体は八十二年前の一九四二年に日本軍がシンガポール占領を始めたその日、その時刻を忘れないためのものであった。私はそのとき日本がシンガポールを占領していたとは知らず、衝撃を受けたことを今でも覚えている。しかし、日本はシンガポールを占領していたけれど、国民に対してはあまり酷なことをした訳ではないのではなか、と今の平和な日本の様子から勝手に憶測し、何故わざわざ国中にサイレン音を響かせるのかと疑念を抱いていた。

そのような私の疑念を払拭したのは、とあるシンガポールの博物館だった。そこにはシンガポールが発見されてから国家として独立に至るまでの歴史が詳細に書かれていた。そしてその歴史の中に、日本軍がシンガポールを占領し虐殺や誘拐などをシンガポールの国民に対し行っていた旨が記されていたのである、それらを見たとき私は頭をガーンと何かで殴られたような気持ちになった。その頃はまだ小学生だったが学校の授業で日本が他国にそこまで酷いことをしていたとは習っていないし、中学生になって本格的に歴史を勉強している今でも日本が被害を与えた国について授業で詳しく扱われたことはないのだ。今までずっと、日本は被害を受けた側の国だと思っていた。なぜなら、学校の教科書には、原爆を降下されたことや他国と日本にとって不利な条約をさせられたことが詳細に書かれていたが、日本が被害を与えた国については教科書の一部分にしか記されていないからだ。そしてこのような教材によって、未来の日本人がまた歴史を繰り返してしまったらどうだろう。自分たちが昔、他国に被害を与えたことを誰も覚えていなければ、きっとまた同じことが起こってしまう。だからこそ私は、主観を捨て、正確な歴史を未来の日本へと繋いでいくことが重要だと考える。特に知識の基盤となる小学生から中学生の学習では日本が被害を与えたことも受けたことも、全て同じ容量で正確に伝える必要がある。もちろん戦争で日本も多くの被害を受け、それによって今も苦しんでいる人がたくさんいる。しかし、日本から被害を受けた国は私たちと同じように苦しみ、辛い思いをしたということを日本国民として認識しなければならない。

これらの正確な歴史をどうやって次世代に紡いでいけばいいのか。学校の教材がすぐに主観を捨てたような正確な歴史を記載するのは難しいだろう。だからまずは、小さな歩みでも自分にできる

ようなことを考えた。そして思い付いたのは、『語り継ぐ』というものだ。文字が無い時代に生まれた、古事記や日本書紀が今でも記録として残っているのはなぜか。それは人々がその物語を口頭で語り継いできたからである。だからこそ、日本という国では人に語ることに大きな意味がある。人から人へ、私の思いは紡がれ大きな波紋となり、日本を変えるのだ。よって私は、自分の経験談と思いを多くの人に伝えるところから始めようと思う。この作文も、その一歩だ。

自分は日本人だからこそ、主観を捨て、戦争に関する正確な歴史と向き合うというのはとても難しいことだと思う。しかし、自分たちの国と向き合い、過去を受け入れることで日本は更に進捗し、私たち国民が住みやすい国になるだろう。